
[成果情報名] イチジク「蓬莱柿」の冬季の切り返しせん定による収穫ピークの分散
[要約] イチジク「蓬莱柿」では、冬季にすべての結果母枝を2芽で切り返しせん定することにより、慣行の間引きせん定利用の場合と比較して、新梢伸長が旺盛となり収穫開始が遅れるが、収穫ピークが分散され収穫後半の収量が増加する。

[キーワード] イチジク、切り返しせん定、新梢伸長、収量、収穫ピーク

[担当部署] 豊前分場・果樹チーム

[連絡先] 0930-23-0163

[対象作物] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

イチジク「蓬莱柿」では、これまで早期出荷したものほど市場単価が高かったため、冬季せん定時に結果母枝を間引きせん定し頂芽を利用することで発芽を早め新梢伸長を制御し、出荷開始を早め収穫前半の収量を多くする栽培体系を採ってきた。その結果8月下旬～9月上旬が収穫ピークとなり、この時期に収穫労力が集中するとともに、近年では出荷が集中するこの時期の市場単価が下落する傾向にある。

そこで、冬季の結果母枝の切り返しせん定により、発芽を遅らせ新梢伸長を促進させて収穫ピークの分散を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 切り返しせん定により、発芽期、展葉期及び収穫開始期が7日程度遅れるが、新梢が長く太く展葉枚数が多くなり、新梢当たりの着果数も多くなる（表1、2）。
2. 総収量及び果重は、収穫前半の収量が多い間引きせん定の方が切り返しせん定よりやや優る傾向があるがその差は僅かである（表2）。
3. 切り返しせん定により、8月下旬の収穫果率が低く、9月中旬以降の収穫果率が高くなり、収穫後半の収量が多くなる（表2、図1）。
4. 収穫時期別の果実の着色割合及び糖度はせん定法の違いによる差はない（表3）。
5. 冬季にすべての結果母枝を2芽で切り返し、結果母枝当たり1本の新梢に芽かきすることで枝梢管理が簡易になる（データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 樹冠拡大中の若木に適用すると新梢が徒長し過ぎて収穫時期が極端に遅れるとともに果実品質も不良となるので、樹冠拡大が終了した成木に適用する。
2. 樹勢が強い樹では、切り返しせん定後の新梢が徒長する場合があるので、新梢が7月下旬時点で長さ90cm、展葉枚数20枚程度になるよう施肥量を控える。
3. 樹勢が衰弱した樹では、切り返しせん定だけでは十分な新梢伸長が得られない場合があるので、側枝の切り戻し、土壌改良、増肥などを併用し樹勢強化を図る。
4. 切り返しせん定により新梢伸長が旺盛となるため、7月下旬に15節程度で摘心する。
5. 結果母枝を切り返すと、先端部に着生する夏果が収穫できなくなるので、夏果生産を目的とする場合は慣行の間引きせん定を利用する。
6. 同一園内に、間引きせん定樹と切り返しせん定樹を混在させることにより、収穫期間の拡大及び収穫労力の分散が可能となる。

[具体的データ]

表1 冬季のせん定法が発芽期、展葉期及び収穫開始期に及ぼす影響（平成17年）

せん定法	発芽期		展葉期		収穫開始期	
	月.日		月.日		月.日	
切り返し	4.15		4.25		8.19	
間引き(慣行)	頂芽4.8(腋芽4.14)		頂芽4.18(腋芽4.23)		8.12	

注) 1. 切り返しせん定区は、冬季にすべての結果母枝を2芽で切り返し。
 2. 間引きせん定区は、冬季に結果母枝を間引くだけで母枝先端を切り返さない。
 3. 何れのせん定法も樹当たり樹冠占有面積は100㎡(10×10m)とし、せん定後の㎡当たり結果母枝数は、切り返しせん定は5本程度、間引きせん定は3本程度とした。

表2 冬季のせん定法が新梢生育、収量及び収穫時期別の果重に及ぼす影響(平成17年)

せん定法	新梢長 cm	新梢基部径 mm	展葉枚数 枚/新梢	収穫果数 果/樹	前半収量 kg/樹	後半収量 kg/樹	果重			
							8月	9月	10月	平均
切り返し	89.3	20.1	21	2671	101.3	87.9	88	65	57	71
間引き(慣行)	47.6	16.1	14	2680	163.0	67.9	91	69	62	79
有意差	**	**	**	n. s.	*	*	n. s.	n. s.	n. s.	**

注) 1. 各せん定法とも㎡当たり新梢本数が5本程度になるよう芽かき。
 2. 新梢長、新梢径及び展葉枚数は7月下旬に調査。
 3. 切り返しせん定区は、展葉枚数調査後に新梢を15節で摘心。
 4. 前半収量は9月上旬までの、後半収量は9月中旬以降の収量。
 5. 果重平均は、収穫期間を通した果重の平均値。
 6. *, **はそれぞれ5%、1%の危険率で有意差あり、n. s.は有意差なし(t検定)。

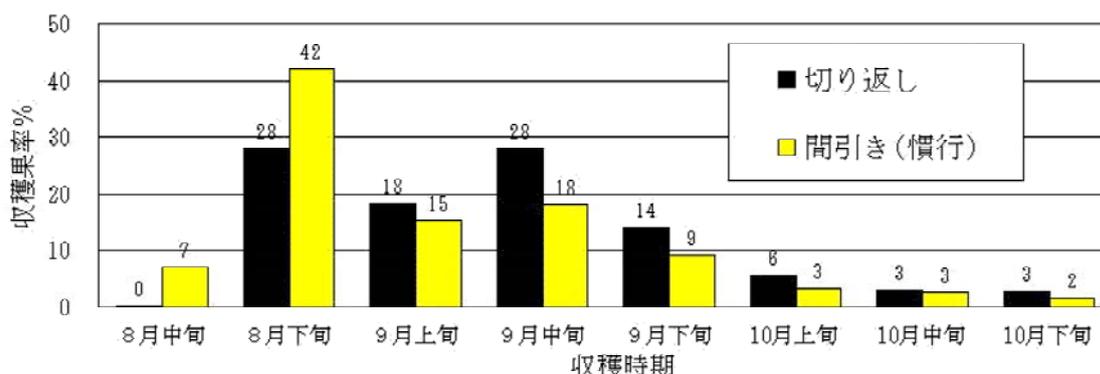


図1 冬季のせん定法が時期別収穫果率に及ぼす影響（平成17年）

表3 冬季のせん定法が収穫時期別の果実の着色及び糖度に及ぼす影響（平成17年）

せん定法	8月		9月		10月	
	着色割合	糖度	着色割合	糖度	着色割合	糖度
切り返し	50	19.4	60	14.4	40	15.0
間引き(慣行)	40	18.2	60	14.6	47	15.2
有意差	n. s.					

注) 1. n. s.は有意差なし(t検定)。

[その他]

研究課題名：抵抗性台木を用いたイチジク株枯病防除技術の開発
 予算区分：国庫受託（高度化）
 研究期間：平成17年度（平成16～17年）
 研究担当者：栗村光男、野方 仁